

聖書：ピリピ 3：17～21

説教題：私たちの国籍は天に

日時：2017年4月9日（朝拝）

前回見た3章12～16節はピリピ書の中でも最も有名なみことばの一つでした。特にパウロの信仰の姿勢が証しされていました。その言葉に大きな励ましを受けたクリスチャンも多いのではないのでしょうか。特に13～14節で彼はこのようにあかししていました。「ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

さて今日の17節以降は新しい段落として記されていますが、16節までの内容の続きとして読むことが大切だと思います。パウロは17節で「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」と言います。いきなりここを読むと、さすがこんなことを言えるのはパウロだけだと思います。また一方では、いくらパウロでもこれは少し言い過ぎではないか、少し自分を高く考え過ぎではないか、もちろん彼は別格であるだろうけれども、などとも思いがちです。しかしその前までの流れを考慮するとどうなるでしょう。パウロは12節で「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」と言っていました。13節でも「私は、自分はすでに捕らえたなどと考えていません。」と言っていました。つまりパウロは完全に達したから、私は皆の模範になり得ると言っているわけではないのです。彼は自分はまだまだだと言っています。つまりパウロが見ならうようにと言っているのは彼が達した状態のことではなく、彼の生き方のことです。すなわち「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走る」という生き方です。15節では「ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう」とも言っていました。この生き方を見ならってほしいと言っているのです。

彼が自分だけを高く持ち上げているのではないことは17節真ん中の「私たち」という言葉にも現れています。ピリピ人たちが手本とするのはパウロだけではなく、パウロを含む「私たち」です。それは誰のことでしょう。おそらくそれはこの手紙で触れられて来たテモテやエパフロデト達を含む人々でしょう。そしてパウロはこれを手本として歩

んでいる人たちに目を留めてくださいと言っています。ピリピ人たちが普段の生活で目を留めることのできた人たち。それはピリピ教会の中にいた人々でしょう。それは主にピリピ教会のリーダーたちのことだと思われます。彼らはパウロやテモテやエパフロデトらにならって歩んでいました。その彼らに目を留めて彼らにならうように！ということ。そして少し細かいことを言うと、ここで「見なろう」と訳されている言葉は直訳的には「一緒に見なろう」という言葉です。新共同訳聖書はここを「兄弟たち。皆一緒にわたしに倣う者となりなさい」と訳すことによって、そのニュアンスを出していません。つまり信仰生活は一人でするものではない。皆で一緒にお互いを覚えて心を合わせながら行なうべきものであるということです。

なぜパウロはこのような勧めをしたのでしょうか。その背景が 18～19 節を読むと分かって来ます。すなわち多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいたからです。これは具体的にどんな人々のことなのでしょう。この「多くの人々」とはピリピ教会のメンバーではなかったと考えられます。パウロは 1 章 3～4 節で「あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、いつも喜んでいる」と言っていました。もしピリピ教会のメンバーの多くが問題のある人たちだったら、どうしてパウロはこのように言えたでしょう。ではピリピ教会を取り巻くこの世の一般の人々を指していたのかと言うと、そうでもないように思われます。この人々はピリピ教会と関わりのあった人々のようです。そしてピリピ教会のメンバーでないのに関わりを持つとしたら、それは外からやって来て影響を与え始めていた人々だったと考えられます。それは誰でしょう。二つの可能性が考えられます。一つは 3 章前半で見て来たユダヤ主義者たちです。彼らは割礼を受けなければあなたがたは救われないと異邦人に教えていました。律法の儀式を守り、まずユダヤ人のようにならなければ正式な神の民になったとは言えないと。その彼らは確かにキリストの十字架の敵として歩んでいたと言えます。キリストの十字架だけでは不十分であり、救われるためにはユダヤ人となり、律法の行ないをしなければならぬと教えていたからです。もう一つの見方は、ここでパウロが問題にしていたのは律法不要論者あるいは無律法主義者たちであるというものです。19 節に彼らの特徴の一つとして「彼らの神は彼らの欲望であり」とあります。すなわち彼らは欲望第一主義者であった。救いはただ恵みによるから、良い行ないは必要ないと主張した人々です。罪人はただ恵みによって救われるのだからと言って、不道德な生き方さえ肯定する人々です。これもキリストの十字架を敵として歩んでいると言えます。なぜならキリストの十字架は、テトス書 2 章 14 節等で行われていますように、聖い生き方を目指すものだからです。そ

れを無視することによってキリストの十字架を無にしている。果たしてこのどっちがここで問題にされている人々なののでしょうか。注解者の意見は注解書ごとに異なっていますので、簡単に言うべきでないとは思いますが、私としてはここで問題にされているのはおそらくこれまで通りユダヤ主義者ではないかと思えます。そうでないと突然ここで快樂主義者たちのことが出て来ることになります。何の脈絡もありません。しかしこの3章はユダヤ主義者への警告から始まりました。彼らは他の地域でもそうでしたが、パウロが宣教した地域に後からやって来てかき乱す活動をしていました。このピリピの地にも彼らの影響が及びかねない状況があったのでしょう。パウロはその人たちにならうことがないように！と言いたいのです。そして逆に守られるためにも積極的に良い模範に見ならうように！と勧めているのです。

このキリストの十字架の敵として歩んでいる人たちについて、19節に4つのことが言われています。一つ目は「彼らの最後は滅びです。」キリストの十字架により頼まず、これを退けるなら、その人に救いは与えられず、最後は滅びに至るのは当然でしょう。二つ目は「彼らの神は彼らの欲望であり」。「欲望」という言葉には印がついていて欄外を見ると直訳では「腹」と記されています。この後見て行くと分かりますように、パウロがここで問題にしているのは考え方、その心が向かう方向に関することです。ここでパウロが「腹」という言葉を使ったのは靈的なものとは異なる方向を向いていることを示すためであったと考えられます。言い換えれば「肉的」「この世的」ということです。三つ目は「彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。」彼らが今誇っているものはやがての日に恥に至る。パウロもかつてはそうでした。4～6節で見ましたように彼は様々な人間的なものを誇り、それを栄光だと考えていました。ところがキリストの光の前ではガラタ同然でしかないことに目が開かれた。そのような恥に最後に至る。そして4つ目は「彼らの思いは地上のことだけです。」まさにこの点がユダヤ主義者の特徴でした。彼らは自分たちがどれだけ律法を守って達成して来たか、この世的、人間的な観点からだけ考え、それで自己満足している。自分たちはかなり上位のレベルに達したとして、その歩みはそこで止まってしまい、まだそこに至らない人々や異邦人を見下し、誇っていた。しかしそんな彼らが見渡しているのはこの地上のことだけ。パウロはそんな彼らに誤って指導されてしまわないように、そうではない良い模範に学び、見ならうように！と言っているのです。

こうして問題ある人々のことが語られた後、パウロは20～21節でキリスト教福音の

立場について記します。20節の最初は「けれども」と始まっています。しかし実は原文のギリシャ語は、そういう言葉で始まっていません。ここは「というのは～だからです」という言葉で始まっています。あるいは「なぜなら」と訳しても良い言葉で始まっています。このニュアンスはここでは結構重要だと思います。その原文に沿って考えるとどうなるでしょうか。パウロは今、キリストの十字架の敵として歩んでいる人たちを非難しました。そして19節最後で「彼らの思いは地上のことだけです」と語りました。その後、この言葉が続きます。「というのは私たちの国籍は天にあるからです。」つまりパウロはこの言葉によって、キリストの十字架の敵として歩んでいる人たちを非難する根拠を示しているのです。彼らの思いは地上のことだけである。それは明らかに誤っている。なぜなら私たちの国籍は「天」にあるのだから。この天に心が向き、天に思いが向けられ、天にあるものを追い求めることに特徴づけられるのでなければ正しいあり方とは言えない。そしてそう聞く時に、私たちは思わずハッとさせられます。自分は果たして天を見上げ、天にあるものを思うところから日々の生活を送っているだろうか。いつの間にか地上のことに心がへばりつき、地上のことばかりあれこれと思う生活になっていなかったらどうかと。パウロはここで私たちの立場を特徴づける三つのことを語っています。

一つ目は「私たちの国籍は天にある」ということです。将来天国に入った時に天国人となるのではなく、今すでに国籍が天にある天国人である。私たちは自分を本当にそのように思っているのでしょうか。もしこのようにはっきり教える御言葉がなければ、私たちは天国に行くまでは自分をこの世の一部と考えたのではないかと思います。そしてその結果、この世の人々と何ら変わらない歩みをしたかもしれません。しかし聖書は私たちはすでに天国人であると語っています。ですから私たちの今の地上生活は、聖書で外国生活にたとえられています。外国人は周りの人から奇妙な目で見られることがあるでしょう。話す言葉も違いますし、その反応の仕方や考え方、習慣、着る服装など色々違います。そのことで笑いの種にされたり、恥ずかしい思いをすることもあるかもしれません。しかし自分が出て来た祖国への愛を持っているなら、その人はその国の人間であることをやめません。同じように私たちも自分の国籍が天にあることを知っているなら、その誇りと自覚を持ってこの世で生活するでしょう。そのことが1章27節で命じられていました。「キリストの福音にふさわしく生活しなさい」という部分は、欄外に注がありますように「御国の民の生活をしてください」という意味でした。大事なことは私たちの心が天に向いており、自分は天に国籍のある天国人であることを心から受け止め

ていることです。

二つ目は「そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」 私たちは天のふるさとに向かって巡礼の旅をしているというイメージで聖書で語られていますが、同時に言われていることは救い主がやがて私たちを迎えに来てくださるということです。キリストは復活して今、私たちの国籍がある天の父なる神の右の座にいます。そこから私たちを迎えるためにもう一度おいでになる。その再臨の日はいつなのか私たちには分かりません。私たちはその日を「待ち望んでいる」と言われています。すなわちいつ来ても良いように、むしろ強い期待を持って「主よ、早く来てください」と祈りながら。ですから私たちは主が天から来られることを思って、いつも上を向いている者たちなのです。地上にありつつ、心は常に天を向いている。コロサイ人への手紙3章1～2節：「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」

そして三つ目に言われていることは、主が天から来られる時、私たちはただ主に会うだけではない。21節にその方は「私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる」と言われています。ご存知のようにキリスト教の独特性は霊魂不滅説ではなく「からだの復活」というメッセージにこそあります。神は人間を魂と体の両方を持つ存在として造られました。従ってその人間の最後の完成は魂ばかりでなく、からだにも現れるというのが聖書の主張です。私たちの今のからだは色々な弱さで特徴づけられています。すぐ疲れてしまいますし、病気にかかりやすいですし、休息や睡眠、継続的な栄養を必要とします。また日に日に老化し、少し前までできたことができなくなる悩みも経験します。そんな私たちにとってもし頭痛がなく、体の痛みもなく、全身が調子いいという日が続いたらどんなに素晴らしいことでしょう。それどころかかの日には私たちのからだはキリストの栄光のからだと同じものに変えられると言われています。先週見たIヨハネ3章2～3節にありますように、その日、私たちは栄光に輝くキリストの本当の姿を初めて見てこの上ない感動に包まれるのですが、その時に何と私たち自身も、そのキリストを映し出すような栄光に満ちたからだを頂くのです。キリストは万物をご自身に従わせることのできる御力によってこのことを私たちに成就してください。それは何という素晴らしい祝福、何という素晴らしい救いの状態でしょう。

うか。

果たして私たちの心はどこを向いているのでしょうか。ユダヤ主義者たちは人間的なものを誇り、自分たちのレベルに達していない人々を見下し、自分たちは完成の状態に達していると考えて自己満足の生活を送っていました。彼らの思いは地上的で、やがて行き着く最後は恥を見るということでした。しかしキリスト教の福音は天を志向するものです。ですからパウロは 14 節で「上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して一心に走っている」と言いました。自分はすでに捕らえたなどと考えておらず、むしろ捕らえようとしてひたむきに前のものに向かって進んでいると。なぜそのように上に向かう生活をするかと言えば、それは今日見て来たように私たちの国籍は天にあるからです。そしてその天から救い主イエス様が来られることを私たちは待ち望んでいるからです。その日に私たちのからだは主と同じ栄光の姿に変えられるとの約束を心から楽しみに待っているからです。そしてこのような祝福を私たちに確実なものとして備えてくださったのがキリストの十字架なのです。

今週は主の十字架を覚える週です。主が私たちの身代わりに尊い命をささげてくださったのは、私たちを滅びから救い出し、私たちを天のいのちへ導いてくださるためでした。従ってキリストの十字架に感謝する人は、キリストが今や打ち開いてくださった天を見上げ、天を志向し、上に召してくださる神に従って、日々前進する歩みに進んでこそ本当です。私たちは地上にありつつも、国籍のある天を見上げて、パウロのように目標を目ざして一心に走る者でありたいと思います。また私たちの信仰の先輩たちに目を留めて、そのように先にあるものに向かってひたむきに進む者でありたい。そして願わくは自らもその歩みにおいて後に続く人々の手本となることができるよう。パウロは私たちがそうしてお互いにお互いに見本となり、励ましとなって、私たちの国籍がある栄光の天に向かっての歩みをともにして行くように！と私たちに勧めているのです。